

『天の露にぬれて』(ダニエル書 4章 24-37節) 2021.10.17.

<はじめに> 神をどのような御方で、物事をどのように進められる御方だと紹介しますか。その認識と理解はどこから得たものでしょうか。4章は私=ネブカドネツアル王(治世 BC605-562)のことばとして記されています。1-3節、37節に、彼の神理解が賛美として記されています。

I ネブカドネツアル王の経験

① 王が見た夢(4-27)

神からのメッセージ「いと高き方が人間の国を支配し、これを見どころにかなう者に与えられる」(17,25)ことが、夢(10-17)とダニエルの解き明かし(20-27)で、ネブカドネツアル王に明確に示されました。しかし、知っていることと、それを自らに適用することは別物です。

② 王の身に起こった(28-33)

この夢から12か月後、宮殿の屋上で権力と栄華を自画自賛する王に天からの声が響き、夢は現実となります。人の中から追い出され、野の獣の如くされました。7つの時は、神のメッセージ(32)を彼が真に理解し、受け留めるまでの神が定めた期間です。

③ 神への賛美と回復(34-37、1-3)

その審判の期間の果てで、卑しくされた彼は神を仰ぎ見て賛美します。天の神・主こそ永遠の至高者で、高ぶる者をもへりくだらせる方であると。賛美は神を崇め、へりくだる者から出て来ます。その時、彼に理性が戻り、人間性を取り戻し、王位へ復帰が許されました。

II 天の露にぬれさせて

① 予め語られる神

神のさばきは唐突で、憤怒の発露なのでしょう。神はユダヤ人を選び、これに語り掛け、彼らを通してすべての国民にご自身の道を示されています。ネブカドネツアル王にも 2・3章で夢と不思議を通じて、本章でも夢と解き明かしで警告と対処を重ねて促しています。

② 機会を与える神

王に明確に語られたことは1年後に成就しました。聞いたことを受け留める十分な時間を神は与えておられます。更に、彼を野の獣とともに住ませ、天の露にさらして、神の道を悟らせ、その前にへりくだるようにと、7つの時を与えて、彼に向き合わせます(37)。

③ 天の露の二面性(23、33)

神は高ぶりと罪に対して妥協はされません。王の身に成就したことは厳しい神のさばきですが、教育的です。「根株は残せ」と彼を天の露にさらさせます。それにより、へりくだって赦しを乞う者には、天の露の神のいつくしみとあわれみを実感する機会です(ロマ 11:22)。

III 天の露がもたらすもの

① 御手の中にある(23、26)

ネブカドネツアル王のように順境にあると人は高慢になります(30)。逆境・試練に遭うと、内省と吟味が促されます。いずれにしても、私たちは神の御手の中に置かれていることを覚えてほしいものです。そこには神の厳しさだけでなく、いつくしみとあわれみも豊かです。

② 回復の道がある(27、36)

神の御手の中で、自分の本当の姿を直視する機会が与えられます。醜く、卑しく、罪と汚れに染んだ自分の歩み・思い・ことばに気づく時です。そんな者の前になお神は立ち、へりくだってご自分に目を上げる者を赦し、引き上げられます。

③ 真実と正義を知る(37)

これらの経験を通ると、神をより深く体験的に知るに至ります。ネブカドネツアル王はそれを賛美のうちに告白しています。個人的な神体験と神理解が、その後の私たちの歩みを支え、祈りの土台となります。

<おわりに> ネブカドネツアル王の記事の最後がこの出来事であることは意味深いことです。彼の生涯に幾度も関わり、御前にへりくだるよう導かれる神がおられました。この神・主が私たちにも語り掛け、関わり、導かれます。その御手に抱かれる者は幸いです。(H.M.)